

## 金子 熊夫

かねこ・くまお=外交評論家、エネルギー戦略研究会会長、EEC会議代表。元外交官、元東海大学教授。ハーバード法科大学院卒。kanek o@hyper.ocn.ne.jp. http://www.eec.com.org



未曾有の大震災と原発事故から丸1年が経過したが、事故の後遺症はまだほとんど全く癒えていない。世間の逆風は益々強まっている。そうした厳しい状況の中、原子力の重要性を公言するには相当の勇気(蛮勇)が必要。実は、筆者も事故以来、反原発派から「御用学者」のレッテルを張られ、東京電力から金をもらつて活動しているなどとあらぬ疑いをかけられている。しばしば匿名の抗議や中傷にも晒されている。今さら釈明するまでもないが、筆者は生粋の文系人間で、原子力のような理系分野には元々無縁だった。1970年代半ばまでの数年間は、外務省の初代環境担当官として、環境問題に深く関係し、

## ウェブ

評時

2012.3.27

有名な「かけがえのない地球」というキャッチフレーズを自ら創案したり、環境庁の名付け親になるなど、日本における環境運動の元祖的役割を果たしたことは知る人ぞ知る。

そのような異色の経験(と自分で言うのも変だが)を持つ筆者が突然原子力問題に深入りするようになったのは、第1次石油危機と

が延々と続き、筆者はその渦中に巻き込まれてしまった。以後背水の陣で対米説得に当たり、ついに故から丸1年が経過したが、事故の後遺症はまだほとんど全く癒えていない。世間の逆風は益々強まっている。そうした厳しい状況の中、原子力の重要性を公言するには相当の勇気(蛮勇)が必要。筆者も事故以来、反原発派から「御用学者」のレッテルを張られ、東京電力から金をもらつて活動しているなどとあらぬ疑いをかけられている。しばしば匿名の抗議や中傷にも晒されている。今さら釈明するまでもないが、筆者は生粋の文系人間で、原子力のような理系分野には元々無縁だった。1970年代半ばまでの数年間は、外務省の初代環境担当官として、環境問題に深く関係し、

## 門前の小僧」の繰り言

インド核実験直後の1977年に米国でカーター政権が登場した時からである。同政権は、アイゼンハワー政権以来の原子力推進政策を一変、極めて厳格な核不拡散政策を打ち出し、その最初の適用ケースとして日本の東海再処理施設の運転や核燃料サイクル計画に「待った!」をかけてきた。その結果日米は激突、困難な外交交渉

が延々と続き、筆者はその渦中に巻き込まれてしまった。以後背水の陣で対米説得に当たり、ついに障上原子力は必要不可欠であるとの確信である。この確信は福島事端で、内外の原子力の専門家、技術者たち、いわゆる「原子力ムラ」の人々とも親密に付き合うようにになり、その関係は30年後の今日も続いているわけである。

しかし、筆者自身は、退官後も延びていくための選択肢はあまり多くない。風力、太陽光、地熱などの再生能源が生き残る中で、無資源国日本が生き残るために何をすべきか、それが筆者の専門家は、謙虚に過去を反省し、全知全能を傾けて、国民が納得できるような斬新な原子力政策(技術面、制度面)を提示すべきだ。紙幅の都合で私見を詳述できないので、技術面に絞って簡略書きすれば次の通りだ。

①どんな大地震や大津波にも耐えられる強靭な原子炉の導入。最新の加圧水炉(PWR)や沸騰水炉(ABWR)の利点をもつと國民に分かりやすく説明せよ。

②小型モジュラー炉(SMR)の実用化。輸出にも最適。在来の大型炉一辺倒路線は見直せ。

③再処理、FBRを軸とする核燃料リサイクル路線の堅持。一度放棄することの権利は一度と取り戻せないことを銘記せよ。

④何よりも、技術者は日本の原子力技術の優秀性に自信を持て。改めるべきはガバナンス化した組織・制度面だ。